

Title	有賀社会学の批判的継承に向けて：学史研究の今日的意義
Sub Title	
Author	三浦, 直子(Miura, Naoko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2000
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.5 (2000.) ,p.84- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集II: 「有賀喜左衛門と社会学」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20000000-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

有賀社会学の批判的継承に向けて

学史研究の今日的意義

三浦 直子

1. 問題の所在

有賀喜左衛門（1897-1979）は、わが国における実証的な郷土研究を開拓し、戦前・戦後の社会学に大きな影響を与えた研究者である。農村・家族・民俗といった枠組みに収まらない豊穡な有賀社会学を、今日いかに批判的に継承できるのか。それが、この小論の問題設定である。

近代日本の社会学創立期にあつて、まさに研究者自らの位置する「社会」を対象とする社会学では、研究者をとりまく歴史的・社会的現実の動向と政治的・思想的背景、自身の生活経験を通じた問題設定や研究姿勢の形成、そして学界の潮流や論壇の問題とが幾重にも複雑に交叉する中で、調査・研究がなされてきた。そこで、激動する社会情勢の行く末を思い描きつつ、自らの生きる近代日本を手探りながら捉えようとしてきた「一個人」としての有賀喜左衛門の姿に注目することで、学史研究の新たな地平が開けるのではないかと考える。本稿では、有賀の生活史と学問形成、近代日本の社会変動とを関連づけて検討するという視点を採用し、彼の軌跡を辿ることを通して、学史研究の今日的意義について考察してみたい。（紙面の都合上、有賀の生涯についての詳細な分析は別稿にゆずり、試案としての素描にとどめることをご了解いただきたい。）

2. 有賀喜左衛門と生活史・学問形成・社会変動

有賀喜左衛門は、1897（明治 30）年 1 月に長野県上伊那郡朝日村平出の裕福な庄屋に生まれる。父・喜左衛門六世は、30 歳（1889 年）で「平出英数学会」という私塾を創立し、同村の文化・教育運動の推進に努めた教育者でもあった。9 歳で父を亡くし、七代目喜左衛門を襲名した有賀にも、村への実践的関わりという父の姿勢は受け継がれたであろう。大地主でもあった有賀は、幼いながらも親方として分家や子方を庇護し、ときに深夜まで年長者である彼らの相談に乗るなど、平出ムラの生活組織の中核的家の家長として、指導的立場に立たされることとなる。こうした村への責任感や実践的関わりの必要性の自覚は、終戦直後に故郷・平出ムラへ戻り、食糧増産運動や農事講習会などの村への奉仕活動を積極的に行なったことにも見出される。有賀自身が回顧するように、まさしく彼にとって研究の根底をなしたものは、彼自身が過ごしたムラでの生活であったといえよう。「生活の場」としての村への実践的な関わり方は、後のモノグラフを用いた村落調査や、実際の村の生活に密着した研究姿勢への萌芽と見ることができる。

仙台の第二高等学校へ進学した有賀は、同期の渋沢敬三・後輩の岡政雄など、後の研究を方向づける生涯の友と出会う。卒業後は吉野作造に師事すべく東京帝大法学部を受験するも失敗し、やむなく京都帝国大学法学部に入学した。戦前であった当時（1918 年）の地方出身者の大学進学率を考慮すれば、有賀が「恵まれた者」「選ばれた者」としてのエリートの負い目と共に、地域・社会貢献という使命感を抱いて吉野法学への期待を膨らませていたことは想像に難くない。しかし大学受験挫折の経験は、有賀に京都・奈良の仏教美術への関心を高めさせ、他方で吉野法学を志した有賀のヒューマニズムは、大正デモクラシーの時代にあつて、クロボトキンらアナキズムに心酔し、トルストイや『白樺』派文学に熱中し、河上肇の資本主義経済の分析の講義に触れマルクス主義へと関心を寄せることとなる。折しも大学入学の翌年には、当時日本の属州とされた朝鮮半島において「万歳騒動事件」と呼ばれた「三・一独立運動」が生じ、1 カ月以上にわたり衝突が朝鮮全土で続いた。これに対して、「白樺」同人の柳宗悦が「朝鮮人を想ふ」という新聞記事を発表。民族・文化への理解を欠いた朝鮮政策への柳の痛烈な批判とヒューマニズムは、有賀に強い感銘を与えている。こうした関心の推移からか、有賀は京都帝大を 1 年で退学、東京帝国大学文学部（美術史学専攻）に入学し直し、上京後は柳宗悦の元を訪れて彼を師と仰ぎ、『白樺』の編集にも携わるようになった。

卒業論文では、柳の影響のもと、反対する主任教授を説き伏せて、当時軽視されていた属州・朝鮮の仏教美術についてまとめている。ここにも有賀のヒューマニズムと時の権力への反骨精神を認めることができよう。論文作成のため、慶州・平壤の仏教美術を 1 カ月余りかけて観察する中で、有賀は、これら朝鮮の仏教美術の根源的理解のためには、仏像を造った人々の生活と心情の根底まで分け入る必要を痛感する。このことは、後の民俗学への接近を準備する体験となった。また、朝鮮滞在を通じて日本の植民地支配の過酷な現実を目の当たりにし、（自らを含む）支配者・日本人の悪態に嫌悪と反省の眼差しを向けている。1922 年に卒業論文「新羅の仏教美術：慶州石窟庵を中心として」を著し、同大学美術史学科大学院へ進学すると、「白樺」派同人たちと『創作』を刊行して文芸・美術論を展開した。1923 年には田舎劇として戯曲「吹雪」を発表し、大正戯曲時代において好評を得ている。吹雪の中を飛び出すアナキスト青年に、マルクス主義やアナキズムに行き詰まった有賀自身の内面告白を読み取るならば、青年の父に代表させる農民の生活の前に、エリート青年の借り物の理論は空虚であることを自ら再確認するための作品であったといえよう。この戯曲発表を境に、有賀は徐々に美術史学から民俗学へと研究の足場を移行・確立していく。加えて、同じく 1923 年には、関東大震災後の混乱の中で各地で朝鮮人の虐殺事件が生じており、卒論作成以来、朝鮮の人々の生活に深い関心を寄せていた有賀は、大きな衝撃を受けた。同時にこの時期は、第一次大戦後から第二次大戦初めの「戦間期」でもあり、個人・家・村落・都市・国家・国際的規模の変革期にあつて、彼が自らの道を見つめる契機となったようである。

大学院を修了した翌 1924 年、岡正雄の紹介で柳田国男に師事すると、有賀は急速に民俗学に傾注し、折口信夫・田辺寿利・池上隆祐・中村吉治らと交流を深めていった。（現地調査を

重視して理論を構築してゆく人類学の手法、マリノフスキーやラドクリフ＝ブラウンの著作に触れたのもこの時期である。） これら学的人間関係を通じて、民族学・民俗学・社会学の様々な学会の運営（民族学会・日本民族学会・社会経済史学会など）、雑誌の創刊・編集（『民族』・『民俗学』・『郷土』など）に携わり、日本社会学界の周辺領域の活性化に貢献した。他方で、1925 年からは渋沢敬三の主催する「アチック・ミュウゼウム（後の日本常民文化研究所）」に参加し、モノグラフによる農村調査を独自に進めるようになる。それは有賀が、博識だが表層的な柳田の研究方法に不満を覚え、むしろ特定の村に深く入り込んで「生活を感じる」ことなしには村の複雑な生活を理解できない、そして各地の村落のモノグラフを積み重ねて初めて日本全体の生活を理解できる、と考えたためであった。柳田は兵庫の学者一家に生まれ育ち、いわば異郷を旅する「村の外部者」であったのに対して、有賀はあくまでも自らの生活の場である村に実践的に関わり「村の内部者」で在り続けようとした。こうした両者の社会的出自の違いが、研究姿勢の相違を生み出したといえるのではないか。また、朝鮮訪問以来、民族・文化の多様性・土着性に早くから注目していた有賀は、西洋理論を一般化して当てはめる既存の研究姿勢に疑問を抱き、日本独自の視点から村の生活を把握すること、わが国に即した理論構築を行なうことの必要性を自覚する。このような視点から、当時論争となっていた小作慣行について、従来の法律的・マルクス主義経済学的解釈を退け、歴史的源流を辿りつつ家や同族団との関連から社会的に分析を行なった。「名子の賦役：小作料の原義」（1933）は、各分野から高い評価を受け、後に代表作となる『農村社会の研究』（1938）、『日本家族制度と小作制度』（1943）へと展開される。

有賀の村に対するこうした研究姿勢が如実に現れているのが、岩手県二戸郡石神ムラの調査である。1935 年に初めて石神ムラを訪れて以来、彼は「大家族（複合家族）」の解体・戦後の農地改革・高度経済成長下の変動と、30 年に渡って調査に従事しており、石神ムラを「第二の故郷」とさえ呼んでいる。石神ムラの変遷を通じて、戦前・戦後の日本社会の変化を探究しようとし、また 30 年間の石神ムラの歴史の中に日本社会全体の行く末と故郷・平出ムラにおける自分自身の軌跡とを重ね見据えようとした有賀は、それゆえ目前の人々の生活の変化を心に刻むことなしには村の生活を理解することはできないという使命感を抱いていた。有賀にとって「民俗学」とは、同時に社会変動を反映する「現在学」としての社会学であったのである。このような有賀の研究姿勢は、在野の研究者で在り続けた彼の周辺性・前衛性を想起させる。小作の人々に対する地主としての責任と負い目、朝鮮の人々に対する日本人としての自責感、村落の人々に対する研究者としての立場への自覚と反省といった、さまざまな次元での矛盾と緊張関係を常に抱えつつ、現場の生活を真摯に見つめ続けようとする有賀の境界人としての学問的位置の基層には、まさに自らの社会的位置における両義性が作用してきたのではないだろうか。

在野の研究者で在り続けた有賀は、49 歳にしてようやく、戸田の再三の要請を受けて東京大学の非常勤講師を勤める。このように、50 歳を目前とするまで自らを公的な「師」とする

ことを快しとしなかった有賀の批判精神や学問的権力への反発が、理論の押しつけではなく、現地のムラの人々の生活そのものを重視しようとした彼の生涯にわたる研究姿勢に反映されていると見てとれよう。その後も数々の大学で非常勤を勤め（中央警察学校・日本大学・日本女子大学・東京高等師範学校・横浜国立大学・横浜市立大学など）、52歳で東京教育大学の教授に就任、初めてフルタイムの「月給取り」となる。同時に、制度化の進む社会学界においても積極的に共同研究・調査に参加し（「社会的緊張」の共同研究・九学会連合による対馬総合調査など）、1952年には秋葉隆・鈴木栄太郎・牧野巽らとともに村落研究会の創立を発起、有賀の構想した専門分野にとらわれない社会諸科学による村落社会の総合的研究を興し、後続の研究者との交流・育成に努めた。定年退職後には、慶応義塾大学教授・日本女子大学学長を歴任し、また日本社会学会会長・日本学術会議社会学研究連絡委員など社会学界の要職を兼任する。周辺から中心へと、社会学界における有賀の位置は変化したものの、晩年には私的に研究会を開催し、意欲的に研究を続けて文明・文化論にまで研究対象を広げている。1979年10月、体調を崩して義兄・池上隆祐の自宅に身を寄せるも間もなく入院、12月に肺炎を患い逝去（享年82歳）。

3. 結語：学史研究の今日的意義

以上、概観してきたように、有賀喜左衛門の生活史と研究姿勢の確立、近代日本の社会変動とは、分かち難く相互に関連している。有賀の著作に描かれている研究成果を十分に理解するためには、彼を近代日本に生きた「一個人」として、その生活軌跡を辿るとともに、学的人間関係や近代日本の歴史的・社会的文脈、政治的・思想的背景の把握を前提としなくてはならない。既存の学史研究においては、著作（テキスト）の「内的」読解が主流であったが、「テキストがコンテクストと一緒に運んでくる」（Bourdieu, P.）ことを忘れてはならない。学史研究を行なう際に、著作を中心に理論内容を「学ぶ」のではなく、個々の研究者が自らの生きる現実社会の中に「問う」姿勢を学んでいくという視点が必要とされるのである。そのためには、今後の課題として、近代日本社会に生きる個人としての研究者を出発点として、彼の学問へのかかわりや人間関係現象を中心としてミクロなアプローチを経由し、学界動向・日本社会学史における位置づけ・現代社会学への影響といったマクロな視点・理論へとつなげていくという研究視座が必要となるだろう。

他方で、ここに描き出された有賀社会学の道程は、ひるがえって近代日本の社会学自体が辿ってきた一つの知的変遷として、またその超克の過程として読み解くことができる。有賀社会学を批判的に継承するためには、彼の研究内容を現代から切り離された「他者」として、いわば過去の遺物として批判するばかりでは、生産的な議論とはなりえない。むしろ、歴史的・社会的転換期にあり価値の多様化がすすんだ現代日本を的確に捉えるために、同様に類稀な歴史的変動期にあった近代日本の社会学者にとって、自らが研究を行なう時代・地域・世相・生活体験の影響を受けつつ、社会をどう捉えてきたのかを問い直すことが重要となる。それは、近

代日本の社会学的研究のルーツと限界とを指摘すると共に、現代における研究が内包する学説的・制度的限界を自覚することで、私たちが「自己」分析の道具として有賀の学問的成果を批判的に継承する道を切り開くものである。近代と現代の間、また戦前と戦後の間における学問的成果の分断が指摘されて久しいが、このような分析視点に立てば、学史研究は現代社会を捉えるための大きな鍵となりうるのである。

【主要参考文献】

- 有賀喜左衛門 1966-71『有賀喜左衛門著作集・全11巻』未来社
有賀喜左衛門 1972「社会学と人間」『未来』65
有賀喜左衛門 1975「民族の心を求めて」『私の自叙伝・1』日本放送出版協会
有賀喜左衛門(中野卓・編) 1980『文明・文化・文学』御茶の水書房
Bourdieu, Pierre 1984 *Homo Academicus* Minuit/1997『ホモ・アカデミクス』石崎晴己・東松秀雄・訳 藤原書店
平野敏政 1981「有賀喜左衛門の家理論」『家族史研究』3
柿崎京一・黒崎八洲次良・間宏・編 1988『有賀喜左衛門研究：人間・思想・学問』御茶の水書房
川合隆男 1996「社会学はいま、何をなすべきか：わたし自身の回想的・内省的な模索（戯れ）」『三田社会学』1
黒崎八洲次良 1986「ある成熟：青年 有賀喜左衛門の場合」信州大学人文学部文学科『人文科学論集』20
三浦直子 1999「有賀喜左衛門：郷土研究を通じた日本社会の解明」川合隆男・竹村英樹・編『近代日本社会学者小伝』勁草書房
中野卓 1981「個人の社会学的調査研究について(1)」『社会学評論』32(1)
武笠俊一 1986「有賀喜左衛門の『白樺』派時代」『社会学評論』37(3)

（みうら なおこ 神奈川工科大学工学部）